

しば子先生の ミニミニ芝生教室

第11回 春が来た



先生：ようやく春が来たわね。

生徒：芝生にとっても良い季節ですね。

先生：寒地型の芝生にとっては確かに良い季節だけど、暖地型の芝生にはまだいい季節は先だわね・・・

生徒：それにまだまだ寒い日も来ますし・・・

先生：そう、花冷えという感じだわ・・・じゃあしば代ちゃん、芝生にとって本当に春と言えるのはいつなのかしら？・・・寒地型の芝生の場合ね・・・

生徒：えっ・・・いきなりですか・・・芝生にとっての春とは・・・暖かくなることだから気温の上昇ですよね・・・

先生：それでは完全な正解とは言えないわ・・・花冷えというように、気温は日によって上がったり下がったりするわよね・・・

生徒：確かに、いつとは言いづらいですね・・・

先生：人間と違って植物は土壌が胃袋・・・冬の間は寒くて養分を吸収できなかつたけれど、春になって目が覚めて養分を吸収し始める・・・と言うことは・・・

生徒：そうか！ 土壤温度で考えなければいけないんですね・・・

先生：その通り・・・でも土壤温度が影響する物は複数のファクターがあるわよね・・・たとえば・・・

生徒：根の生長ですね！

先生：その通り！・・・寒地型芝の根の成長適温は土壤温度 **10 ~ 18°C** より、だから土壤温度を冬から測り始めて **10°C** を超えたたら春ということね・・・ではもう一つ土壤温度に影響を受けるものは何？

生徒：根以外ですか・・・？・・・うう～ん・・・あっ、ひょっとして土壤微生物？！

先生：その通りよ！・・・土壤微生物も同じように土壤温度 **10°C** を超えてくると活動を始めるわ・・・土壤微生物によって土壤中の肥料成分が植物に吸収されるイオンに変えられる事になるので、まさに土壤温度 **10°C** が春の肥料の施肥のタイミングということね・・・

生徒：なるほど・・・やはり土壤温度は外気温以上に重要なものなんですね、芝生にとっては・・・

先生：人間はいつも芝生の地上部しか見ていないから土壤中の事を忘れがちだけど、芝生にとっては地上部同様・・・あるいはそれ以上に土壤中の出来事が大切な事なのよ・・・でも人間は地上に住んでいるから土壤中の事はなかなか理解できないわね・・・土壤の温度をモニターすること・・・土壤中の水分量を測ること・・・土壤分析をす

ることなどは人間の感覚では理解できない土壌中の事象を正確に理解するために必須の事だわね・・・

生徒：ほんとにその通りですね・・・人間の勘では土壌の出来事はわからないですよね・・・ところで暖地型の芝生にとっての春はいつになるんでしょうか？

先生：暖地型芝の根の成長適温は土壤温度 **24 ~ 29°C** だわ、だから東京あたりでも 7 月後半ごろの気候かしら・・・

生徒：それでは本当の春には成長しないんですか？

先生：いいえ、やはり **10°C** を超えたあたりから少しずつ根は動き出すわ、でも土壤温度が **24°C** を超えるあたりまでは本格的ではないわね・・・逆に寒地型の芝生は土壤温度 **21 ~ 24°C** が生育の限界・・・ちょうど暖地型の最適期と入れ替えね・・・

生徒：まさに寒地型芝にとっては人間の春と秋がベストシーズンで暖地型芝は真夏がベストシーズンなんですね・・・

先生：外気温では寒地型芝が **24 ~ 27°C** が成長適温、暖地型芝が **27 ~ 32°C** と言うことでこちらも入れ替わり・・・土壤微生物は高い土壤温度の方が活動が高くなるから暖地型芝生と同じ成育曲線となるわね・・・

生徒：そうか土壤微生物は暖地型なんですね・・・

先生：そうね・・・確かに暖地型だわ・・・(笑)

生徒：寒地型芝と暖地型芝では生長適期が違うから施肥のタイミングも違うわけだけど、土壤微生物は暖地型芝と一緒に元気になってくるわけだから、春と秋の施肥は種類を考えないといけませんね・・・

先生：そうよ、良くわかっているじゃない・・・肥料の分解には土壤微生物の活動は不可欠だわ・・・特に土壤微生物の活動によって簡単に分解するもの、分解に相当な時間がかかるもの・・・様々なタイプがあるから肥料をしっかり選ばないと十分な養分を適切なタイミングで吸収させることができないわ・・・特に有機肥料は分解に年単位でかかるので注意が必要・・・また緩効性の窒素肥料でもメチレン尿素などのように微生物の分解が必要なものは時期によって肥効が変わるわ・・・最近の窒素固定型緩効性やリニア型の樹脂被覆は日本のような冬は寒くて夏は高温多湿で寒暖の差の激しい、しかも雨期があるような厳しい気候ではもっとも無駄のない効果的な肥料タイプと言えるわね・・・ところで肥料の「**4R**」って知ってる？

生徒：えつつつ・・・(汗)

